

「語学教育におけるコミュニケーション能力の育成」の 共同研究について

鈴木そよ子

これまで大学の語学教育におけるコミュニケーション能力の育成問題は、当然のことながら語学教育の分野で論じられてきた。ところが近年、この問題を教職課程に密接な問題として捉えねばならなくなった。それは教育職員免許法改正に起因している。

これまで教員免許取得のために、免許教科に関わりなく、第 66 条科目として、「日本国憲法」「体育」の 2 科目の履修が義務づけられてきた。この第 66 条科目が 2000 年度の教育職員免許法改正に際して、「日本国憲法二単位、体育二単位、外国語コミュニケーション二単位及び情報機器の操作二単位」と改められたのだ。

この改正に対応して、各大学ではそれぞれのカリキュラムに即した科目を設定するが、新たな第 66 条科目のために科目を新設した大学は少ない。すでに多くの大学で、必修あるいは選択必修科目として語学科目やコンピュータの基本的科目を設けていたから、これらのなかから、文部科学省の行政指導過程で明確になった条件にあう科目で、学生が一般に履修できるレベルの科目を選び、第 66 条科目として申請した。

「外国語コミュニケーション」科目の条件は、シラバスにおいて、授業内容・授業計画の説明として「会話」が明記されていることである。もちろん英語に限らず、大学開講の全外国語を対象とすることも可能となった。

新免許法に基づく教職課程カリキュラムが施行されてすでに 3 年が経過している。教職課程としては、各分野の担当教員がその科目領域の方針にしたがって指導したものを第 66 条科目として認定するだけなのだが、外国語教育におけるコミュニケーション能力の育成について、どのように捉えるべきなのか、どのような教育方法が望ましいか

という問題について、教職課程として考えねばならなくなった。

今年度はこのような問題意識を持って、ドイツ語に的を絞り、村上祐子氏と共同研究を行った。村上氏は研究者の両親のもとでドイツに生まれ、一旦帰国した後、再び小学校上学年から大学卒業後までドイツで生活し、帰国後 10 年間、大学のドイツ語教育に携わってきた実績を持つ。バイリンガルの語学教員として、ドイツ語の「コミュニケーション」科目を担当しながら、前述の問題について、授業経験を踏まえ、実践的に考えを深めて来られた研究者である。授業実践やドイツ語教育について意見を交換しながら共同研究を進めてきた。この間の共同研究のまとめとして、村上氏の執筆による 2 論文を報告する。

「大学におけるドイツ語教育の問題—いわゆる『コミュニケーション』授業をめぐる—」は、語学教育の歴史的な展開を踏まえながら、一般の語学教育、専門教育それぞれについてドイツ文化理解に裏づけられた語学力の必要性を述べ、コミュニケーション能力育成のための授業方法を具体的に展開している。

「ドイツ社会をよりよく理解するために—女性問題を中心にして—」では、先の論文で触れているコミュニケーションの基盤となる日本とドイツの文化の違いを具体的に論じている。ドイツの教育制度から生活習慣まで幅広く言及しながら、女性の意識や生きる姿勢の違いについて、鋭く分析している。

文部科学省は、学習指導要領においても「国際化」「情報化」への対応を重視しており、そのような人材を育成するための教員の素養として第 66 条科目の 2 科目を新たに加えたのであろうが、文部科学省が意図した以上の問題の重さに気づかせてくれる 2 論文である。